

粵方言話者の軟口蓋鼻音脱落について

楊 詔 人

要 約

粵方言者的舌根鼻音脫落問題

楊 詡人

在粵方言區的日語學習者中，經常出現鼻濁音中的舌根鼻音脫落問題，有時還出現一些不應出現的鼻化現象。

經對粵方言的鼻音進行調查，發現粵方言中不但有各種鼻音，而且還較日語的發達。其中舌根鼻音不僅存在於音節尾，還出現於音節首。但這些位於音節首的舌根鼻音只出現在半開元音以上開口度較大的元音之前。加之粵方言中出現於音節首的舌根鼻音容易脫落，這種現象尤其在年輕一代中更為突出，且因地區不同而異，離廣州越遠越嚴重，到了即使是位於鼻音後的舌根鼻音也照樣脫落的程度。

經分析研究表明，粵方言的發音方法和發音點與日語的非常接近，但發音習慣略有不同。粵方言區的日語學習者中所出現的這種舌根鼻音脫落現象主要是因受母方言發音習慣影響所致，表現為發舌根鼻音時軟顎下降所致。有時軟顎雖有所下降，但因下降不到位，無法形成閉鎖，導致呼氣同時由口腔和鼻孔噴出而產生鼻化現象。

外国語学習の第一歩は言うまでもなく、それは発音の習得である。その発音習得の善し悪しは、会話やヒヤリングなどの習得にも影響される。したがって、正しい発音の習得は外国語学習者にとってはきわめて重要である。

しかし、外国語の発音はそれほど容易に習得されるものではない。その主な原因はやはり学習者の母語または母方言の発音の干渉であろう。具体的に言うと、一つは新しい音声の調音が難しいことである。「われわれの調音器官は幼児の時から、母語音声の調音に慣れているが、その他の調音は、されたことがないか、または段々されなくなったため、永遠に抑制された状態になっている。もちろん、このような調音能力が完全に喪失してはいないが、しかし、ほとんどの人が外国語にある新しい音声の習得時に経験した調音器官の自主制御の難しさが、調音器官の硬直化を証明した。」(Sapir, 1921:39) もう一つは、われわれの耳は母語または母方言の音声には敏感だが、新しい音声には往々にして鈍感で、聞き分けるのが困難なため、新しい発音の習得もそれだけ難しくなることである。それも Sapir (1921:43) の言うように、「人間の耳は有限個の共鳴音しか聞き分けられない」からであろう。

例えば、粵方言話者が日本語の鼻濁音を習得する際、軟口蓋鼻音が脱落してしまうケースがよく見られる。特に連続音声の場合、その現象がもっと著しくなる。図1は粵方言話者 WHX (男性、20歳前後。以下、特に断らないかぎり、みな粵方言区出身で日本語学習歴1年の20歳前後の日本語科学生) が読んだ「きげん」([kigen]) の広帯域スペクトログラムだが、[ŋ] が脱落して [kien] になっている例である。図2は LXN (女性) が読んだ「あげる」([ageru]) の広帯域スペクトログラムで、[ŋ] が脱落して、その [ŋ] のあるべき位置に声門閉鎖が見られ、[aʔeru] になっている例である。

図1、図2で示したのは粵方言区出身の日本語学習者によく見られる軟口蓋鼻音脱落の比較的典型的な例だが、問題はそれだけではない。時には彼らも自分の読んだ鼻濁音にあるべき軟

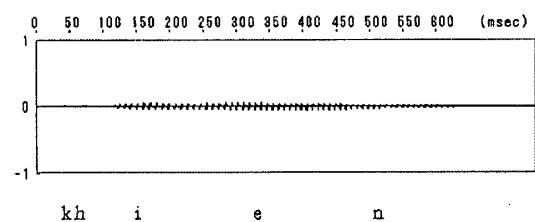


図1 WHX が読んだ [kien] (きげん)

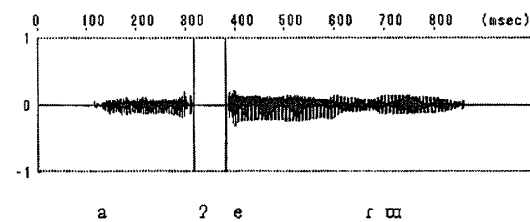


図2 LXN が読んだ [aeru] (あげる)

口蓋鼻音が脱落していることに気づいたのだろうか、無理に語中のそれを出そうと努める。その結果、その前の音節にも鼻音が付いてしまうケースも少なくない。例えば、図3はCJM（女性）が読んだ「おぎなう」の広帯域スペクトログラムで、無理に [ŋi] を出そうとしたせいだろうか、実際の発音は [ŋoŋinau] になったケースである。ただし、このような現象は、鼻濁音の直前のア行音に限る。それは、恐らく軟口蓋鼻音を出すため、始めから鼻濁音のつもりで調音し、音節の開始部（onset）のない、母音だけで音節になるア行音の開始部に軟口蓋鼻音 [ŋ] が付いて、その続きで後の鼻濁音が出しやすくなったためであろう。上に挙げたLXNも同じく、鼻濁音を極力出す代わりに、結局 [aŋerɯ] の語頭に軟口蓋鼻音が余計に付いて、[ŋaŋerɯ] になったのである（図4参照）。

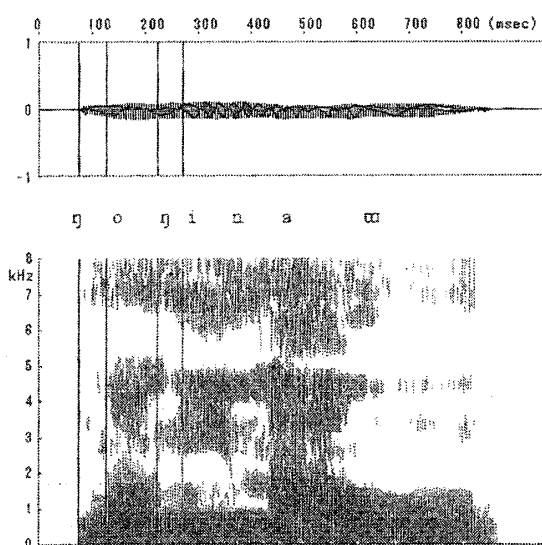


図3 CJM 読んだ [ŋoŋinau]（おぎなう）

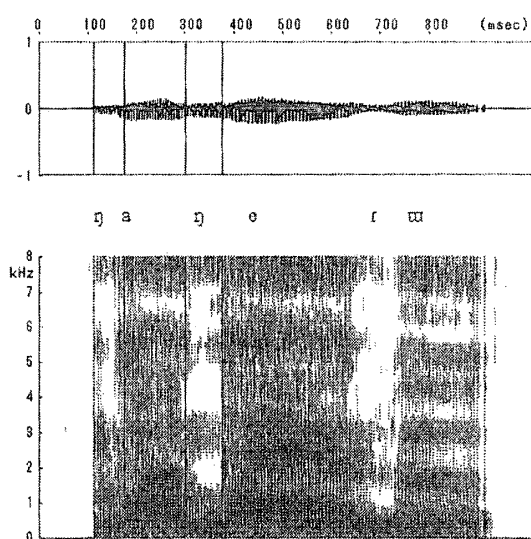


図4 LXN が読んだ [ŋaŋerɯ]（あげる）

しかし、極力出したお陰で、軟口蓋鼻音は確かに発音できるが、その勢いが余ったせいだろうか、当該音節の反対側にまた軟口蓋鼻音が現れるケースも見られる。例えば、LXN（女性）が読んだ「えごころ」は、音節の開始部に軟口蓋鼻音 [ŋ] は出たが、同音節の末尾にも [ŋ] が付いてしまったのである（図5参照）。しかも、このような間違いは、ランダム方式で録音した6回のうち、2回あったので、偶然とは思われない。

そのほかにもまた、例えば「おぎなう」[oŋinau] を [oinnau] と読んだように、軟口蓋鼻音が脱落していると同時に、当該音節の末尾に鼻音が挿入されるケースも見られる。しかし、それはその直後の音節の歯茎鼻音 [n] による逆同化のため、前の音節に鼻音が付いたと考えられよう（図6参照）。

粵方言話者の日本語学習者に見られるこれらの問題は、粵方言に軟口蓋鼻音がないか、または少なくとも音節の開始部にはそれがないから起こった現象だと思われるかもしれない。確かにもしそうであるなら、まさに Sapir の言う通り、母語または母方言にない新しい外国語の音声の調音は難しいことになる。しかし、粵方言には軟口蓋鼻音が立派にある。しかも、中国の北方方言と違って、音節の末尾（coda）にのみでなく、開始部にもある。

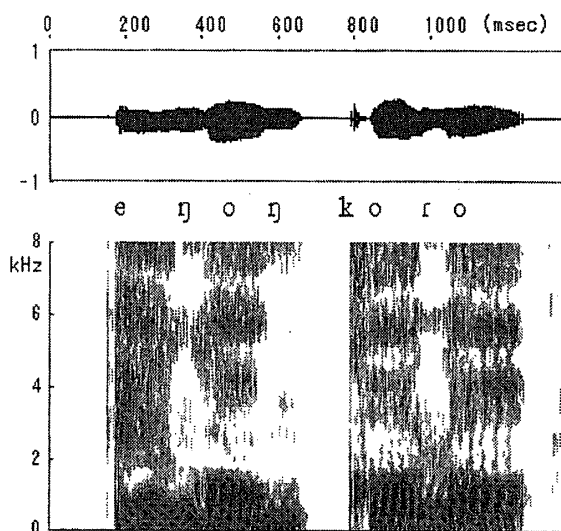


図5 LXNが読んだ [egonkoro] (えごころ)

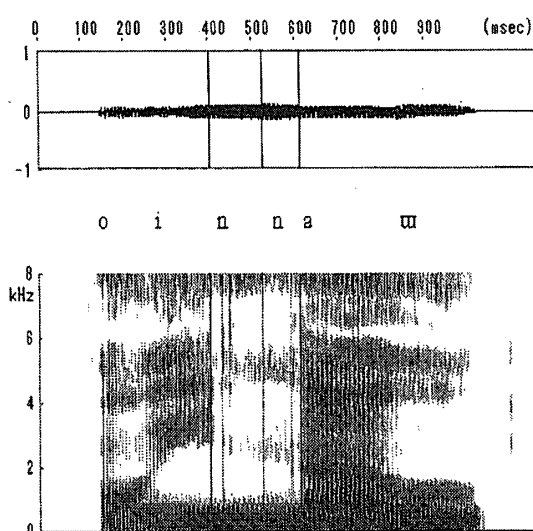


図6 LXNが読んだ [oinnau] (おぎなう)

粵方言と北方方言及び日本語に鼻音のある音節の構造を見てみると、全体としてみな同じく C+V+C の構造になっていることが分かる。その細部である開始部、核部（母音）、末尾、特に開始部の鼻音については表1に示したとおりである。

表1 粵方言、北方方言、日本語の音節構造対照表

	北方方言	粵方言	日本語
C 開始部	閉鎖音、摩擦音 鼻音 [m、n] 破擦音、側面音 そり舌音、半母音	閉鎖音、摩擦音 鼻音 [m、n、ŋ] 破擦音、側面音 半母音	閉鎖音、摩擦音 鼻音 [m、n、ŋ] 破擦音、側面音 弾き音、半母音
V 核部	単母音、2 重母音 3 重母音	単母音、2 重母音	単母音、2 重母音
C 末尾	鼻音 [n、ŋ]	鼻音 [m、n、ŋ] 入声音 [p、t、k]	鼻音 [n、ŋ]

表1で明らかなように、音節開始部の場合、北方方言にはそり舌音があり、日本語には弾き音があるのに対して、粵方言にはそれらの発音はないが、その他の子音は種類の上では同じである。核部には北方方言だけ単母音と2重母音のほか、3重母音もあるが、粵方言と日本語には単母音と2重母音だけになる。末尾の場合、鼻音はみな持っているが、粵方言には入声音が余計にある。

確かにどれも鼻音はあるが、しかし、よく見てみると、その内容が少し違う。まず開始部には、粵方言も日本語もともに両唇鼻音 [m]、歯茎鼻音 [n] と軟口蓋鼻音 [ŋ] があるが、北方方言にはそれがない。また、末尾の場合、北方方言も日本語も歯茎鼻音 [n] と軟口蓋鼻音 [ŋ] だけ持っているが、粵方言にはそれに加えて両唇鼻音 [m] も持っている。なお、粵方言では、軟口蓋鼻音が単独でも音節になる。例えば、「五」、「誤」、「吾」などは全部 [ŋ] と読む。全体として、粵方言の鼻音が発達しているように見える。

このような比較の結果を見ると、粵方言区の日本語学習者に見られる鼻濁音脱落はいかにも不可解な現象だと思われるだろう。確かに粵方言も日本語と同じく開始部に軟口蓋鼻音 [ŋ] がある。しかし、よく調べたら、両者には何らかの形で違うところがあることが分かった。

日本語の [ŋ] はすべての母音（前舌広母音 [a]、前舌半狭母音 [e]、前舌狭母音 [i]、後舌円唇半狭母音 [o]、後舌狭母音 [u]）の前に現れうる。一方、粵方言の [ŋ] はほとんどが口の開きが比較的広い母音の前には位置する。狭母音の前に位置する例は現在ではほとんどない。ほとんどないとは、もともと後舌円唇狭母音 [u] の前には [ŋuŋ] 2語と [ŋuk] の1語が現れていたが、[ŋuŋ] の2語のうち、1語は普通 [juŋ]（壅）と、もう1語は現在では [uŋ] または [wuŋ]（滂）と読み、[ŋuk] も普通 [uk]（屋）と読む（蘇1994）。すなわち、後舌円唇狭母音 [u] の前に現れうる [ŋ] はすべて脱落してしまったのである。また、前舌非円唇狭母音 [i] の前に現れうるのも [ŋit]（嚙）の1語だけで、しかも [ŋat] と読まれるのが一般的である。

このように、粵方言では、軟口蓋鼻音 [ŋ] は狭母音の前にほとんど現れない。あっても脱落する。その他の母音の前に位置する [ŋ] もまた脱落しやすい。『実用広州音字典』を調べたら、音節の開始部に [ŋ] の付いた語が全部で191語だが、そのうちの69語は [ŋ] の脱落が許される。事実、みなそう発音している。一見この比例はそれほど大きくないように見えるが、しかし、それは少なくとも50代以上の粵方言話者の読み方である。50代以上の粵方言話者は、その軟口蓋鼻音を『実用広州音字典』の記載した通り、脱落しないところはきちんとはっきり発音するのである。例えば粵方言の「挨打」（殴られる）は正式には前字（注）の「挨」の開始部に軟口蓋鼻音が付いて、[ŋaita] と読む。図7に示したのは広州生まれ、広州育ちの50代男性 CRJ が読んだ「挨打」の広帯域スペクトログラムで、一番脱落しやすい前字の開始部に位置する軟口蓋鼻音もちゃんと調音されていて、はっきりした [ŋaita] になる。

ところが、現在の若い人は、もともとあまり脱落しない [ŋ] も脱落して読む傾向にある。それは地方によって、また家庭によって差があり、例えば図8に示している広帯域スペクトログラムのごとく、広州生まれ、広州育ちの HMY（女性）が読んだ「挨打」がちゃんと [ŋaita] と読んでいるように、[ŋ] がまだ脱落しない若者もあるが、同じ広州出身で広州育ちのものでも、軟口蓋鼻音が脱落しているものもある。例えば図9に示しているのは同じく広州生まれ、広州育ちの ZMY（女性）が読んだ「挨打」の広帯域スペクトログラムで、軟口蓋鼻音が脱落して、[aita] になったのである。つまり、同じ前字の開始部の場合で、しかも同じ粵方言の本拠地広州においても、軟口蓋鼻音は揺れているのである。

この軟口蓋鼻音の脱落の傾向は、同じ粵方言話者の中でも、広州を離れれば離れるほど強くなる。例えば、図10は深圳生まれ、深圳育ちの CJM（女性）が読んだ「挨打」の広帯域スペクトログラムで、前字の開始部に位置すべき軟口蓋鼻音が完全に脱落して、[aita] になったのである。

次は、後字の開始部に位置する軟口蓋鼻音の実状を見てみよう。前字の末尾に軟口蓋鼻音のある「驚訝」（[kɪŋŋa]）（ことの意外さに驚く）を例に取ってみよう。広州生まれ、広州育ち

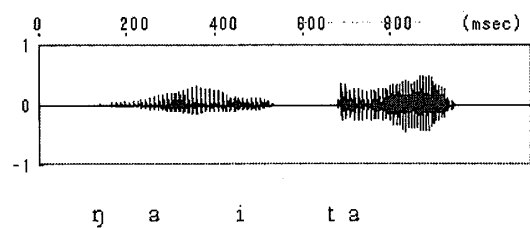


図7 CRJ が読んだ [ŋaita] (挨拶)

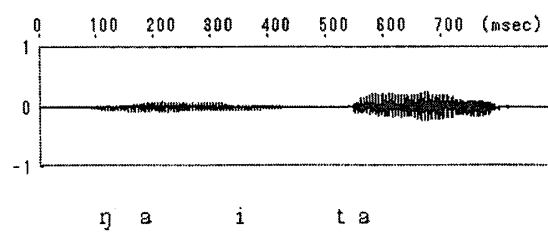


図8 HMY が読んだ [ŋaita] (挨拶)

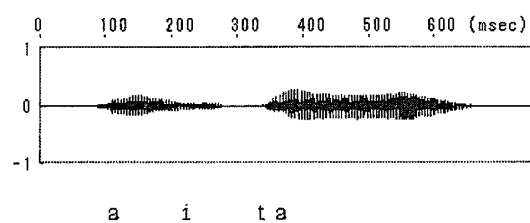


図9 ZMY が読んだ [aita] (挨拶)

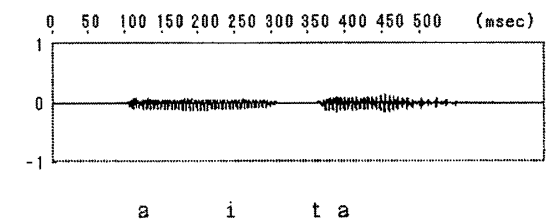


図10 CJM が読んだ [aita] (挨拶)

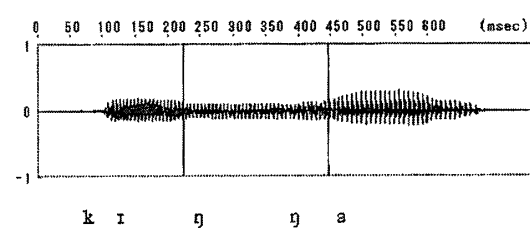


図11 CRJ が読んだ [kɪŋŋa] (驚訝)

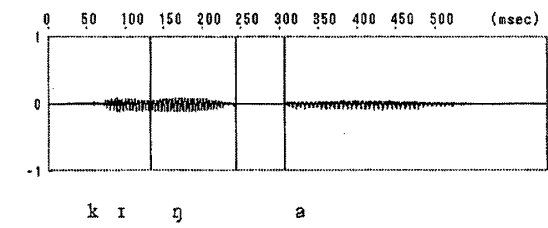


図12 CJM が読んだ [kɪŋa] (驚訝)

の50代男性 CRJ が読んだ「驚訝」はちゃんと [kɪŋpa] になっている（図11参照）が、深圳生まれ、深圳育ちの CJM（20代の女性）が読んだ「驚訝」は、もう [kɪŋpa] になっていて、後字の [ŋ] のあるべき所には声門閉鎖になってしまっている（図12参照）。

図11に示した「驚訝 [kɪŋpa]」のような語は、たとえ前字の開始部にある軟口蓋鼻音を脱落して読む20代前後の広州生まれ、広州育ちの若い話者でも、やはりその後字の「訝」([pa])の開始部である [ŋ] が鼻音「驚」([kɪŋ])の後に位置するため、その影響で脱落しないのが一般的である。しかし広州から離れた深圳の粵方言話者は、たとえ前字の末尾に鼻音があっても、その影響を受けないで脱落しているのが現状である。ほかの場合の開始部に位置すべき軟口蓋鼻音はもはや完全に脱落してしまったのである。

以上の考察で、同じ粵方言話者でも、若いほど軟口蓋鼻音が脱落しやすいこと、また、同じ方言区でも、本拠地である広州から遠ければ遠いほど脱落する傾向が強いことが分かる。

では、同じ日本語学習者で、母方言の音節の開始部に軟口蓋鼻音がかもと存在しない北方方言話者が日本語の鼻濁音を習得する際、軟口蓋鼻音の脱落現象はあまり見ないのに、本来母方言にそれが存在するにもかかわらず、日本語の鼻濁音を習得する際にそれが脱落されるのは、いったいどういう原因なのだろうか。

よく観察してみると、粵方言話者が軟口蓋鼻音調音の際、軟口蓋は一応ある程度下がったが、しかし十分に下がらなかったのみでなく、後舌が同時に上がらなかったため、軟口蓋と一緒に閉鎖を作らなかったため、呼気の一部が鼻孔から放射されたため、鼻音化ではあるが、軟口蓋鼻音とは思われない現象がある。例えば、深圳生まれ、深圳育ちの CJM が読んだ「おぎなう」は [oõinau] になる（図13参照）。しかし、鼻音化といっても、それは著しいものではなくて、かすかに聞こえる程度のものであった。これは明らかに軟口蓋は下がったが、後舌は上がらなかったため、両者が接触する、すなわち閉鎖を作らなかったため、呼気の一部は口腔から、もう一部は鼻孔から放射されたことに起因したものだろうと考えられる。また例えば、広州生まれ、広州育ちの HMY が読んだ「おぐら」は実際の音声実現は [oõura] で（図14参照）、これ

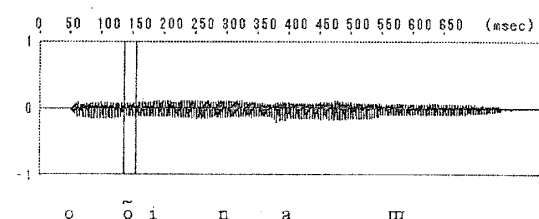


図13 CJM が読んだ [oõinau]（おぎなう）

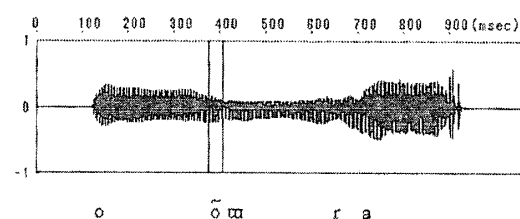


図14 HMY の読んだ [oõura]（おぐら）

も CJM が読んだ [oōinaw] と同じく、軟口蓋が十分に下がらなく、鼻孔から呼気が漏れたため、かすかな鼻音化になったと思われる。このような現象は、日本語の鼻濁音「ぎ」、「ぐ」の場合に特に著しい。それも、上に述べたごとく、粵方言では、狭母音の前に位置すべき軟口蓋鼻音がほとんどなく、あったとしてもそれが脱落してしまうことに関係があらう。そのような事情で、日本語の「ぎ」、「ぐ」の軟口蓋鼻音も他の鼻濁音より脱落しやすくなるし、また、たとえ軟口蓋が下がったとしても、出されたのは軟口蓋鼻音ではなく、せいぜい鼻音化された音声である。

もともと、広母音の方が狭母音よりも口蓋帆が下降しやすい状態にあり、したがって、鼻音化しやすい口腔形状になっている。口蓋帆の動きは、呼気流の速度が速いと、閉じる方向に動いて鼻音化を妨げる（清水1986）。これは鼻音が母音の後に来る場合に現れる現象であるが、次に広母音が来るため、口腔が広い方向へと動く時も、軟口蓋が下降しやすく、鼻音も出しやすいだろう。一方、次に来るのが狭母音の場合は、声道、主に口腔が自然に小さくなる方向へ動き、呼気流も早くなるので、軟口蓋が相対的に下降しにくくなるため、軟口蓋鼻音も出しにくくなるのではないかと思われる。しかし、それは軟口蓋が下降しにくいだけで、ある程度、例えば少しの隙間が出るぐらい下降して、鼻孔からの息漏れにより、わずかに聞こえる程度の鼻音化はされると考えられるだろう。事実、粵方言区の日本語学習者に見られる軟口蓋鼻音の代わりに出た鼻音化もその程度のようなもので、図13と14の2本の線で挟まれたところを見ても分かるように、その鼻音化されたのはごく短く、その前の母音が終わって調音者が次の狭母音 [i] や [u] の調音点に移る直前にできたものである。

しかし、粵方言話者が日本語の鼻濁音の発音をする時、軟口蓋鼻音の調音のため、いったい軟口蓋がどの程度下がり、また後舌がどの程度上がり、両者の間でどのぐらいの隙間を残して調音したのかといった問題の解明は、例えばX線撮影などによる実験研究の必要がある。

もう一つは、現在の粵方言区の日本語学習者は、ほとんどが若者で、彼らはもうすでに音節の開始部にある軟口蓋鼻音を脱落させて調音することに慣れていて、日本語の鼻濁音の場合でも、その慣れた方法で調音してしまうことにも原因があらうと推測されよう。

それから最後に、日本語の音節の開始部にある軟口蓋鼻音と粵方言のそれとは、調音点も調音法もほとんど同じだと思われ、それで母語または母方言のやり方で、すなわち、母方言を話す時と同じく軟口蓋をちょっと下げるだけで、または完全に下がるまでを待たないで、次の調音へ移してしまうことに原因があらうと考えられる。

そもそも、調音法が似ている、調音点も大体同じだとはいうものの、実は両者の間に、例えば舌の前後の位置、口の開き、気音の有無など、やはりいくらか微妙な差がある。それで実際に外国語音声調音される際、そういったほんの少しだけの差はあまり考慮されないし、また、たとえその差を知ったとしても、習慣の力で、知らず知らずに母語または母方言の調音点や調音法などでやってしまうのがよくある現象である。このように、母語または母方言とはっきりと違った真新しいものではなく、差の小さいものは、かえって正しく習得できない問題の根源になる。これは、外国語にある新しい発音を習得する際に起こる普遍的かつ大きな問題の一つ

としてあげられるのではないと思われる。

一方、北方方言話者にとって音節の開始部にある軟口蓋鼻音の調音は、今までまったく経験したことがないのみでなく、それと似た調音も経験したことがない真新しい調音法で、始めから習っている発音であるにもかかわらず、正しく習得できる。それは、まったく経験したことのないものだからこそ、それをやる習慣がないということで、干渉が少なく、少なくとも最初の段階は強く意識しながら調音点や調音法をよく習い、よく把握した上で調音するものだから、かえって間違いがされない、あるいは少なくてすむのだ考えられる。

もともと、鼻濁音は日本においても、それを話す地方は限られている。また、その歴史もそれほど古くはない。室町時代の謡曲から始まっただろうといわれている（杉藤1996）。今ではそれを使う人が段々少なくなっていることも報告されている。「関東以北で多く用いられるが、西ではあまり用いられない。最近では、東京でも急速に衰退し、老年層を除くと、／いがい／／かがみ／等の母音間のガ行が、軟口蓋－摩擦音 [ɣ] や軟口蓋－破裂音 [g] になることが多い。」（松崎・河野1998）

しかし、だからといって習わなくていいというわけにはいかない。共通語ではやはりそれをよく使用している。また、もし鼻濁音ではなく、有声破裂音として調音すると、今度は別の問題——有声破裂音と無声破裂音の区別の問題——が出てくる。例えば、「私が」を「私か」になったり、「…したいですが」を「…したいですか」になったりするなど、有声破裂音を無声無気音として発音してしまうおそれのある、もっと大きな問題になるのである。これについての考察は別の機会に譲ることにしたい。

注：中国語の場合、2字でできる語が多い。普通、2字でできている語のうち、前に位置する字を前字、後ろに位置する字を後字と称す。

参考文献

- Edward Sapir, 1921, *LANGUAGE AN INTRODUCTION TO THE STUDY OF SPEECH*. 中国語訳：『語言論』，陸卓元訳（1985），商務印書館
- 小泉 保，1996，『音声学』，大学書林
- 黄 皇宗，1989，『広州話教程』，中山大学出版社
- 斉藤純男，1997，『日本語音声学入門』，三省堂
- 清水克正，1986，「言葉と音声（I）—音声学」，西田龍雄編，『言語学を学ぶ人のために』，世界思想社
- 杉藤美代子，1996，『日本語音声の研究1 日本語の音』，和泉書院
- 蘇翰羽中，1994，『実用広州音字典』，中山大学出版社
- 藤村 靖，1972，『音声科学』，東京大学出版会
- 松崎 寛・河野俊之，1998，『よくわかる音声』，アルク
- 楊 詡人，1995，「粵方言区の日本語学習者に見られる発音問題」，神戸女学院大学『論集』第41巻3号
- 楊 詡人・崔勇，1999，「日語学習中の語音錯誤分析及指導」，『日語学習与研究』1号
- 楊 詡人，2001，『日語語音学』，華南理工大学出版社

（原稿受理 2002年11月21日）